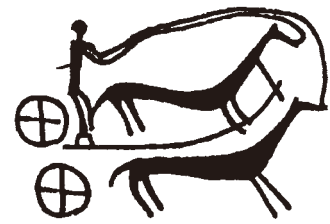


ニュースレター

Hokkaido University
Institute for the Advancement of Higher Education

北海道大学 高等教育推進機構
Newsletter No. 97



学生調査から見える北海道大学の学生像 (7 ページ)

キャリアデザイン I 開講 (18 ページ)

英語コミュニケーション with 小西先生 (21 ページ)

(詳しい目次は裏表紙にあります)

巻頭言 FOREWORD

国際的通用性のある GPA 制度の導入について

高等教育推進機構副機構長 総合教育部長 理学研究院 教授 鈴木 久男

本年度から総合教育部長を仰せつかっております。専門は物理学素粒子論ですが、ここでは私の専門のお話ではなく、成績評価制度について述べさせていただきたいと思えます。というのも、北海道大学の第二期中期目標に「GPA 等による厳格な卒業判定基準の導入」や「国際的に通用する単位互換制度を構築する」とあり、これには比較的緊急な対応が必要だからです。このような中期目標を立てている背景には、知的基盤社会の中でグローバルに移動する学生が不利益にならないために、成績評価制度について国際化を視野に検討しなおす必要が生じていることが挙げられます。そもそも北大では平成19年度入学者から GPA 制度の導入を進めてきましたが、当初は国際的通用性ということは念頭になかったのではないかと思います。しかし、GPA 制度は、アメリカやカナダ、中国、韓国、東南アジア諸国で導入されており、国際的な共通通貨に対応するものです。そのため、北大の GPA 制度とその

運用も、国際化を視野に再検討する時期がきているのです。

それではアメリカでの GPA 制度とその運用はどのようになっているのでしょうか？ まず、多くの大学では、A, B, C, D, E (F) のグレードにプラス、マイナスを含む高精度の GPA 制度を導入しています。たとえば、B+は3.3で、B-は2.7です。誤差として最大±0.2程度の数値ですので、これにより卒業時までの GPA として有効数字3桁程度が保証されます。そして、卒業判定基準として GPA2.0 以上であることが条件となっています。また、在学中通算 GPA2.0 未満か、前期 GPA1.5 以下の学生は指導観察状態におかれ、教員などの履修指導がなければ履修することができません。このような履修指導にもかかわらず、三期連続 GPA2.0 未

の学生には退学勧告がなされます。また、大学院入試における要件として GPA3.0 以上であることが求められます。韓国の大学などでも同様であり、グレードはアメリカと完全互換です。ちなみに、アメリカの多くの大学では、A+はAと同じ GP 値 4.0 ですが、コーネル大学や、韓国、その他アジアの幾つかの国の大学では GP 値 4.3 としています。アメリカの大学院進学時の GPA としては、韓国などの 4.3 スケールの GPA は、受け入れ大学側が A+= 4.0 として再計算します。

おそらく皆さんの中には、このような外国の GPA 制度は、私たちの成績評価と比べて随分厳しい制度だとお感じになっている方が多いのではないのでしょうか？ しかし、一方で多くの方が非常に違和感も感じられるかと思えます。それは、私自身の感覚としても、成績評価は十分厳しく行っているからです。むしろ、GPA 制度が導入され、全学教育などで GPA2.45 程度というガイドラインが出されているために、本来「優」評価に値しない学生にまで「優」をつけなければならず、GPA 導入後の成績評価が甘くなっていると感じる場合も少なくないのです。この場合、結局相対評価であるからと納得するしかありません。相対評価における本来あるべきグレードとのずれは、相対評価の最大の欠点の 1 つであり、相対評価がよいのかあるいは絶対評価がいいのか国際的にも決着がついていません。いずれにせよ、私の専門科目での評価は、絶対評価としては GPA2.0 以下であることが多いのです。しかし、やはり成績は順位付けに使われることがありますので、相対評価的な観点を導入したりして、何らかの補正をします。以上のような私の経験を離れても、現在、多くの学科での卒業時 GPA は 2.0 以下です。これには、平均より低くて問題であるという意見があるのは事実です。一方では、厳しくつけるのは厳格な卒業判定基準であるのは確かなのです。

それでは、アメリカなどでの GPA 制度と北大での成績評価ではどちらが厳格かを見ていきたいと思えます。

まず、アメリカの現在の平均 GPA は 3.0 以上です。つまり、大学院入学の要件というのは平均以上であることを意味します。しかも多くの有名私立大学では、GPA が 3.4 を超え、成績インフレとして問題にもなっています。つまり 7 割程度の学生に、

A+, A (GP4), A-, B+, B (GP3), B- のグレードを与えてしまうことが多いのです。一方、D (GP1), F 評価を与える学生数の科目別平均はそれぞれ 5% 程度です。このため、全体として GPA2.0 以下の学生数も少なく、ほとんどの有名校の 4 年卒業率は北大よりも高くなっています。たとえば 2006 年には、州立大学の UC Berkeley の 3.22 はまだ低い方であり、ハーバード大学 3.45、スタンフォード大学 3.55 などです。私たちがこのようなアメリカの現状を見ると、「秀、優」評価が過半数となり、なんて甘い成績評価をつけていると思われる方が多いでしょう。つまり、一見するとアメリカの教員よりも、私たちの方がはるかに厳格にしているわけです。

それでは、先に感じた違和感の理由は何に起因しているのか見ていきます。このことを見るために、ワシントン大学の FD で使われた成績評価ガイドライン案を見てみます。そこに記されている C (GP2) 評価の表す学習の質は、「いくつかの学習成果があったと認められるが、一般にはぎりぎり許される結果。この科目に続く教科の単位修得の可能性はある。」となっています。また D (GP1) 評価は「ぎりぎりに許される成果ではあるが、科目のすべての面において非常に低い水準にある。この科目に続く教科の単位修得は極めて疑わしい。」であり、不可 Fail (GP0) は、「学習成果を示す証拠はなかった。この科目に続く教科で、単位修得の可能性はない。」とあります。どうでしょうか？ ワシントン大学の D 評価は、私たちの「許していない」レベルの学習成果の質に対応しています。一方、アメリカでの不可は以前北大にあった「評価せず」に対応していることがわかります。

このことを裏付けるもう一つの資料として、ヨーロッパ各国とアメリカのグレートとの国際的単位互換表があります。インターネットでも Grade Conversion Site があり、その典型例を見ることができます。それによると、イタリアを除くヨーロッパ各国の「可」の評価は「C」(GP2) に振り替えられます。ヨーロッパ共通の欧州単位互換制度 (ECTS) でも、pass 評価に対応するのは C 評価であり、ECTS で FX という、「可とするにはもう少し努力が必要」に対応するのが D 評価となっています。つまり、GP 値 1 というのは本来科目の質保

証がされていないのです。

それでは、アメリカの GPA 制度では私たちには「許せない」学習成果である D 評価を、なぜ「許している」のでしょうか？ これには、単位の実質化の差が関係していると考えられます。アメリカ、いや海外の多くの国では科目は週 2 回の授業と討論や演習、実験がセットとなった 4 単位科目が主流で、2 単位科目は少数です。また各科目で課題も多くだされるため、半期 16 から 18 単位程度くらいしか履修できません。このような履修状態の中で、不可となる科目があると 4 年では卒業できなくなる可能性が極めて高くなります。このため、教員は安易に C 評価以上を与えてしまう可能性があります。学生に卒業がかかっていると言われると多少甘くつけたくなるのは私も経験があります。この安易に可を与えない対策として、本来科目を十分に履修したとは言えない場合には、D 評価をつけ、他の科目で挽回すれば卒業できるようにしているのです。東京大学の進級振り分けでも「平均点合格制度」という、似たような仕組みで毎年大勢の学生が救われていると聞きます。いずれにせよ、このように平均で合格点とすれば、教員は D 評価をつけやすく、厳格な成績評価ができるようになるのです。

別の言い方をすると、北大の成績とアメリカの成

績の問題は、円とドルの為替の問題に似ています。いや香港ドルとドルの関係に似ていると言った方がよいかもしれません。同じドルという名称でありながらそこには換算レートが必要なのが、現状の北大 GPA と US GPA の間の関係と言えるでしょう。しかしそれはある意味当然でもあります。それぞれのグレードの評価基準はその国固有のものであり、アメリカでもここ数十年かけてそれぞれのグレードの持つ価値が進化してきました。40 年ほど前までアメリカの GPA は 2.4 程度であり、エリート達が集まる大学は、入りやすく出にくいと言われていました。多くの高校生が進学を考える現在のアメリカの有名校は、入りにくく出やすい大学へと変化してきたのです。このようなことから、秀評価を導入し、それに番号をつけて GPA と称した北大のグレードとアメリカの評価とのずれがあるのは、ある意味当然でもあるとも言えます。

しかし、大学の国際化が期待される現在、このようなずれを放置しておくことはできません。

現在北海道大学では、学部教育検討拡大 WG で全学部からの委員により成績評価のあり方について検討しています。皆さんにも北大の成績評価制度の国際化についてお考えいただければ幸いです。

平成 25 年度北海道地区 FD・SD 推進協議会総会開催される

表記の会合が 11 月 25 日 (月) 学術交流会館で開催されました (表 1)。今回は特別講演に中央大学の横田氏を迎え、大学改革における職員の役割についてうかがいました。午後のテーマ別セッションでは、3 グループに分かれて、参加大学が互いに報告・討議しました。

特別講演

横田氏は中央大学卒業後事務職員として母校に採用されました。最初は同窓会に配置され、暇をもちあまし組合活動に参加しました。次の経済学部事務室では名物職員として活躍しながら、1978 年多摩移転闘争にも組合側から参加し、教員の考え方、「当事者意識」について学びました。次の経理部では副課長に抜擢されましたが、同時に「高等教育問題研究会」や学内の自主研究会「大学問題研究会」にも参加し、学習を重ねました。1991 年からは総合政経学部の新設に担当課長として関わり、多くを学びました。新設学部の方針は学生サービスの革新であり、次の 5 つの方針のもとで活動しました。①何にでも挑戦する、②学生参加の学部創り、③学生サービスの内容を革新する、④入学から就職まで事務が積極的に関与する、⑤最高の報酬は給与よりも感動である。

その後、事業部 (出版など) を経て研究開発機構の創設、経理研究所での公認会計士養成、附属横浜中高の開設に関わりました。この間、大学行政管理学会会長 (2007-2009)、私大連業務創造研修〈新構想の研修〉運営委員長 (2005-2011) も務めら

れました。以下、その経験から SD のあるべき姿を話されました。

現在、高等教育をとりまく環境の激変により大学改革の推進が求められています。その中で、職員の職務領域は「教育」「研究」「社会連携・地域貢献」「経営・管理」すべての分野で拡大し、その業務は高度化複雑化しています。単位の実質化や高大連携、コンソーシアムなど 1990 年代半ばまであまり耳にしなかった領域や概念がたくさん出てきています。これからの職員は、上記 4 分野での業務サポートにとどまらず「教員に信頼されながら協働し、人・業務・組織・制度・資金その他の資源とシステムをマネジメントして大学の使命達成に貢献する、プロフェSSIONナリズムにあふれた」方が望まれます。

また、教員が「教育する大学」から学生が「学習する大学」への転換がはかられている今、職員には「自己改善メカニズムの中核」「教育力と経営の統合」「学生の多角的なサポート」などの役割が求められています。これより SD の目的は、大学改革実現へのマネジメント業務のできる職員の能力開発ということになります。しかし、実際には大学の活動は多様であり、特定の能力開発に的が絞れないことは不安です。一方で、実績を上げている大学も多数あります。SD の豊かな推進には、トップが期待される職員像を示し、そのための研修内容となる必要があります。また、成果を褒める仕組みも重要です。育成型人事システムへの転換、自ら学ぶ職員を支援する仕組みなどを加えたシステムがあつて初めて SD は機能します。 (細川 敏幸)

表 1 平成 25 年度北海道地区 FD・SD 推進協議会総会プログラム

第 1 部 (10:00 ~ 12:00) 会場: 学術交流会館 1 階 小講堂 1. 開会挨拶 (北海道地区 FD・SD 推進協議会代表幹事校 北海道大学 理事・副学長 新田 孝彦) 2. 特別講演「大学改革における職員の役割 ―SD の発展のために―」 (元大学行政管理学会会長, 中央大学横浜山手経営再生室担当部長 横田 利久) 3. 議 事 ①平成 25 年度活動報告 ②平成 26 年度活動計画
第 2 部 (13:00 ~ 15:00) 会場: 学術交流会館 1 階 第 2・3・4 会議室 テーマ別セッション ・テーマ 1 「アクティブ・ラーニングについて」 ・テーマ 2 「FD の参加者を増やす工夫について」 ・テーマ 3 「SD の現状について」

テーマ1：アクティブ・ラーニングについて

この分科会は、北海道工業大学有澤準二教授を司会に11大学から15名の参加がありました。各大学での取組はさまざま、アクティブ・ラーニングに対応した教室の整備、科目群の設置、体験学習の実例などの紹介がありました。

アクティブ・ラーニングを取り入れた授業内容の紹介では、地域連携として市民と連携する活動が多くみられました。その他にも、もの作り、大学のパンフレット作成、建物のリフォーム、ゲームのプログラミングなど、やりがいのある企画のもとで、学生が主体的に学び成長してゆくよう工夫されているようです。

現在のアクティブ・ラーニングに関する問題点は、授業の構成・実施に非常に手間がかかる点です。そして、熱心な教員のみで運営されている場合が多く、担当教員が担当を止めた場合の持続性に問題があります。また、必ずしも授業内容の専門に合致した教員が担当しているとはいえないようです。全学的な協力、もしくは大学間の連携の下で行われれば、もっと効率よく様々な体験学習を構成できるのではないかと感じました。(山田 邦雅)

テーマ2：FDの参加者を増やす工夫について

北海道大学細川敏幸教授を司会に、国立4大学、公立1大学、私立4大学、高専1校の計10校から12名が参加しました。

FD(教員研修)は、大学院教育、学士課程教育ともに大学設置基準等にて義務化され、各大学で実施されています。本セッションでは、自己紹介の後、各大学のFDの概要、参加者数、メインテーマである参加者を増やすための工夫などの事例紹介のうち、質疑応答を行いました。

参加者を増やすため、FD出席を義務化する事例が複数紹介されました。ある大学では、要全員出席のFDを実施し、不参加者には当日のビデオを見てのレポート提出を求めています。FDへの出席だけが目的ではなく、意志共有などのFDの目標を達成するという点に重きをおいているためだそうです。

FDの実施形態を工夫する事例も複数紹介されました。教授会の直後にFDを開催し参加者を増やしている大学もあります。教授会非対象教員の参加が少ないことが今後の課題だそうです。一方、参加者

に出向いてもらうのではなく、講座単位の出前FDを実施している事例も報告されました。数年単位で全講座を回る計画で、同一の研修内容のためFD担当者の負担もそれほど大きくないそうです。

延べ参加者数が増えても、FDに興味・理解のある教員に固定化されてしまうこともあるようです。FDの目的をあらかじめ提示し、学内教員が共有すべき内容の全員参加型FDと、狭い内容・領域に特化した参加募集型FDの棲み分けを明確化した上で、全員参加型FDを最低限受講させる環境作りをしている事例も報告されました。

最後に、他大学の取組を参考事例として、各大学におけるFD改善に取り組む必要性が指摘されました。(竹山 幸作)

テーマ3：SDの現状について

参加者は司会・記録を含めて12名で、うちわけは、私立5大学6名、公立2大学2名、国立1大学4名、事務職員8名、教員4名でした。うち1名は、午前の部で講演いただいた横田利久氏です。司会者北海道大学高等教育推進機構・木村教授の挨拶に続いて、参加者がそれぞれの大学のSDの状況と継続していく上で直面している問題等について報告しました。

近年、道内の大学でもSD(またはFD)という言葉を使いながら、さまざまな研修が行われています。SDに教員が参加する、あるいは、FDに職員が参加するなど、教員と合同で開催しているという例が、私立大・公立大から紹介されました。管理部門の発想にとどまらない、大学にふさわしい研修のあり方を探る取組も進んでいます。SDという言葉を使っていなくても、従来の「紋切り型」の研修は大学にふさわしくないと考え、人材育成方針とつなげて内容を検討していきたいという公立大の例、若手の事務職員が、大学の業務のあり方を原点に立ち帰って調べ、発表するなど、職場の課題と連続性を持つ研修を工夫することにより、人材育成をはかっている私立大の例は、そうしたものです。参加者からは、研修を実施するだけでなく、いかに成果を導くかが重要だという見解が表明される一方、性急に評価しようとするとは必ず失敗を招くという指摘もありました。研修の成果とは何なのかというポイントを外すことのない評価のあり方を検討していくこと

が課題だといえるでしょう。

大学団体や学外のネットワークによる研修の中にも、個別の大学の研修を改善していくことにつながるヒントがありそうです。学外の研修に参加した者が、学内で報告会を持つなどして経験を共有してい

くとりくみも広がっています。国立大にも積極的な研修の改革例はありますが、FD・SD推進協議会総会に参加がないのが残念です。大学職員セミナーの成果報告を刊行するなどして、国公私を問わない経験交流をはかっていくべきでしょう。(光本 滋)



写真1 横田氏の特別講演

写真2 テーマ別セッション (テーマ2)

全学教育 GENERAL EDUCATION & 総合教育 FIRST YEAR EDUCATION

学務委員会報告

平成 25 年 12 月 4 日 (水) に平成 25 年度第 4 回学務委員会が開催され、以下の議題について話し合いました。

平成 25 年度第 4 回学務委員会

議題

1. 平成 26 年度全学教育科目の開講計画について
2. 平成 26 年度全学教育科目に係る T・A について
3. 平成 26 年度全学教育部・総合教育部行事予定表について
4. 大学院理工系専門基礎科目及び大学院共通授業科目のナンバリングについて

報告事項

1. 平成 18 年度からの教育課程の検証及び平成 26 年度の実施に向けての検討・改正内容について
2. 平成 25 年度英語Ⅱオンライン授業の報告につ

いて

3. 1 年次学生の異動について
4. 平成 26 年度新入生オリエンテーション及び総合教育部ガイダンスについて
5. 平成 26 年度大学院理工系専門基礎科目及び大学院共通授業科目の開講計画について

平成 26 年度全学教育科目の開講計画

平成 26 年度の全学教育科目の開講計画について審議されました。その結果、「学問の世界」は平成 25 年度同様に、集中講義形式で 9 月 16 日～19 日に実施されることになりました。他の科目も例年通りで特に変更点はありません。

平成 26 年度全学教育科目に係る T・A

平成 26 年度全学教育での T・A 採用について審議されました。平成 26 年度の T・A は、755 の授業科目に対して、1,103 名の T・A の任用が承認さ

れました。

平成 26 年度全学教育部・総合教育部行事予定表

全学教育部・総合教育部行事予定表について審議されました。4月8日に入学式を行い、第1学期授業開始は4月10日(木)からになります。例年通り第1学期の6講時授業も5月19日から順次実施されます。8月6日から夏期休業となり、8月18日(月)正午が成績報告締め切りです。第2学期の授業開始は9月26日(金)で、2月3日(火)が第2学期授業終了日となり、成績報告締め切りは2月9日(月)です。

また、学科移行のスケジュールについては、ほぼ例年通りとなり、主たる変更点はありません。

大学院理工系専門基礎科目及び大学院共通授業科目のナンバリング

大学院理工系基礎科目と大学院共通授業科目のナンバリングについて審議されました。

平成 18 年度からの教育課程の検証及び平成 26 年度の実施に向けての検討・改正内容

平成 18 年度からの教育課程において、単位の実質化についての措置の教育効果の検証結果、また、

それらを元にした今後の検討課題について報告がありました。

平成 25 年度英語Ⅱオンライン授業の報告

英語Ⅱではオンライン授業が行われています。この授業の利点と問題点と改善点についての報告がありました。

平成 26 年度新入生オリエンテーション及び総合教育部ガイダンス

平成 26 年度の新入生オリエンテーションが4月7日午前中に、そして午後からは、総合入試学生に対して学部・学科等移行ガイダンスが、そして学部別入試学生に対して学部ガイダンスが行われることが報告されました。

平成 26 年度大学院理工系専門基礎科目及び大学院共通授業科目の開講計画

平成 26 年度の大学院理工系専門基礎科目と大学院共通授業科目の開講計画について報告されました。また、平成 25 年度の大学院共通授業科目の履修者数は 2,379 名で、前年度から増加していることが報告されました。

(鈴木 久男 理学研究院教授・総合教育部長)

IR INSTITUTIONAL RESEARCH

「学生調査 2012 年報告書」から見える 北海道大学の学生像 (2)

ニュースレター 95 号では、学生の時間の使い方について紹介しましたが、今回は大学入学後の知識・能力の変化について分析した結果を示します。ここでは、20 の質問項目(能力)に関して、「大きく増えた」、「増えた」、「変化なし」、「減った」、「大きく減った」の 5 段階で回答を求めています。

図 1 は、「増えた」あるいは「大きく増えた」と回答した割合の合計を、連携大学を含めた全大学と本学学生についてグラフ化したものです。まず本学

1 年生について見てみます。最も数値が高いのは、「コンピュータの操作能力 (77%)」でした。次いで「一般的な教養 (62%)」という結果です。1 年生が、能力の向上を実感し、客観的に自己評価できる能力が「コンピュータの操作能力」という結果には納得ができます。

最も数値が低いのは、「リーダーシップ能力 (21%)」でしたが、この質問に対して自己評価するのは難しいと考えられます。結果的に、「変化

なし (67%)」の回答が多くなっています。次いで数値が低い項目は、「卒業後に就職するための準備の程度 (22%)」でした。近年の学生は社会情勢を受けて、就職に関しては入学時から意識しているように見えますが、1年次において具体的な準備を行っている学生は少ないと解釈することができます。

続いて、本学の1年生と3年生を比較して、その特徴を見てみます。同時期の1年生調査と3年生調査の結果ですので、調査の対象は同一個人ではありませんが、様々な特徴が表れています。能力の増加が最も大きいのは、「専門分野や学科の知識 (1年生 57%→3年生 94%)」、「卒業後に就職するための準備の程度 (同 22%→55%)」と続きます。3年生になり、専門教育を受けて知識を吸収し、就職に関して具体的に行動を始めている様子がうかがえます。能力に関する質問ですので、すべてにおいて1年生より3年生の数値が高いことを期待しますが、「外国語の運用能力」と「コンピュータの操作

能力」は3年生の数値が低くなっています。「コンピュータの操作能力」については、1年次に一定の能力を得て、それを維持していると考えられますが、「外国語の運用能力」については能力の低下を示す自己評価となっています。社会におけるグローバル化の流れの中で、比較的高い外国語の運用能力を持ちながら、自信を持っていない学生の自己評価は低くなると考えられます。標準テストなどを考慮した客観的な評価を考慮する必要があると考えています。

さらに、全大学と本学のデータを比較してみます。図1の通り、ほぼ同様の傾向を示しますが、1年生から上級生への能力の伸びを比較すると、本学の伸びは全大学に比べて低い項目が多いことがわかります。本学の自己評価基準が厳しいと解釈することもできますが、特に人間形成に関わる質問において「増えた」あるいは「大きく増えた」と回答する本学の学生が比較的少ない点には注目すべきでしょう。

(宮本 淳, 徳井 美智代)

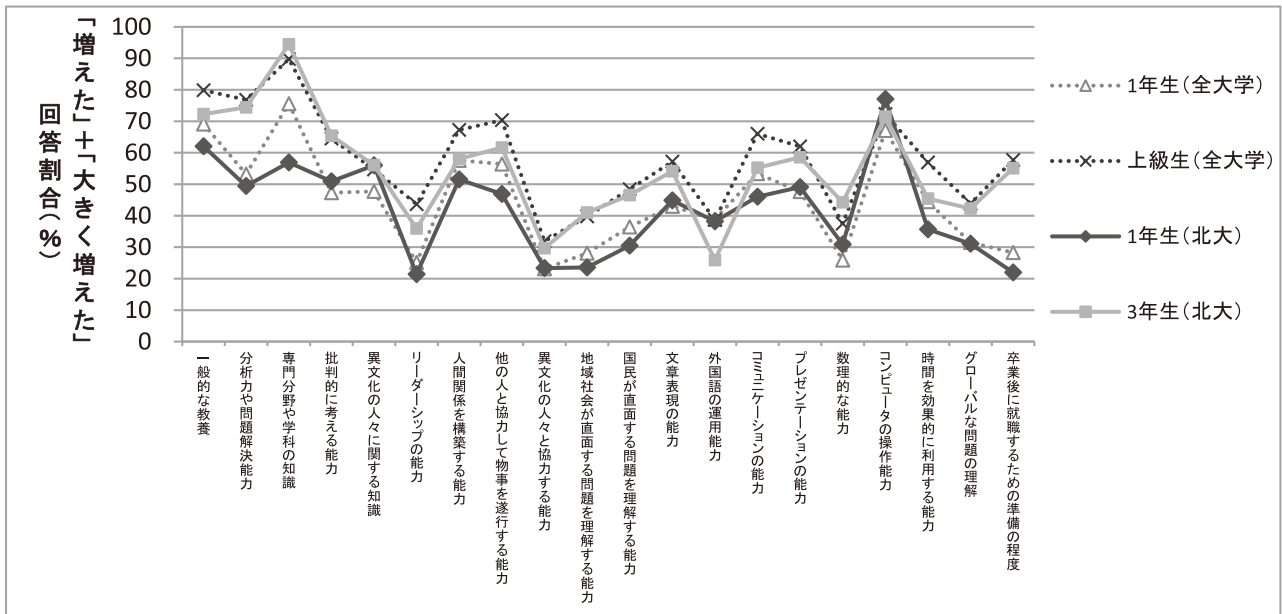


図1 大学入学後の知識・能力の変化に関する質問に「増えた」あるいは「大きく増えた」と答えた本学学生の割合

高等教育 HIGHER EDUCATION

第 16 回ソウル大学・北海道大学ジョイントシンポジウム 分科会「総合力と創造力のための新しい教育的試み」

第 16 回ソウル大学・北海道大学ジョイントシンポジウムが開催されました。本シンポジウムは、第 1 回の 1998 年以降、毎年交互に開催校となり全学的な交流をはかっているもので、今年はソウル大学で開催されました。

高等教育推進機構は、18 ある分科会のひとつとして、ソウル大学 Center for Teaching and Learning (CTL) との共催で「総合力と創造力のための新しい教育的試み」を 12 月 13 日に実施しました。CTL との共催は 5 回目、本学から 3 名、ソウル大学から 11 名の計 14 名が参加しました。

ソウル大学からは、①ソウル大学での大規模公開オンラインコースの発展に向けて (Lim Cheolil 教授) と、②ソウル大学での反転授業の事例研究 (Kim Sunyoung 助教) が報告されました (写真 1)。

反転授業は、日本でもある自治体の小学校で試行することが発表されるなど、注目され始めています。現在、学習者は授業にて講義を受け、授業外に宿題などで復習するという流れが一般的です。この“授業”と“授業外学習”で行う内容を入れ替えるのが反転授業です。すなわち、レクチャーに該当する内容を、ビデオ等の教材をもとに学習者が事前に予習をし、授業ではグループで課題について討論するなどのアクティブラーニングを行います。ソウル大学

では、学部生向けの数学と、大学院生向けの非線形論で反転授業を試行しており、学生の満足度も高いそうです。これを受け、来年度には実施授業を 5 コース程度に増やす計画を立てています。

一方、本学からは、③インターネットを使った北海道 7 大学教育共同学習システム (細川敏幸教授) と、④北海道大学のオープンコースウェア (山田邦雅准教授) について報告しました。

北海道大学を含む道内 7 大学が連携して、教養教育の充実をはかる事業が進められています。インターネットを用いた遠隔授業システムを構築し、各大学から授業を提供し合い配信するというものです。平成 26 年度はトライアル期間として試験的に授業を実施し、平成 27 年度からの本格実施を目指しています。将来的には 200 科目の提供を目標にしているそうです。ソウル大学の方からも多くの質問が寄せられました (写真 2)。

近年、学びの多様化や学生の主体的学習の促進への対応のため、様々な教育手法が開発されています。日本だけではなく、海外の試行事例等を参考にしながら導入を検討する必要性を再認識しました。

来年度は、本学が開催校となりシンポジウムが開催される予定です。ソウル大学 CTL と協力し、実りある分科会にしたいと考えています。(竹山 幸作)



写真 1 Lim Cheolil 教授の発表のようす

写真 2 質疑応答のようす

授業の質保証をめざして ～第23回北海道大学教育ワークショップ～

11月8～9日、北広島クラッセホテルで第23回北海道大学教育ワークショップを開催しました。学内の20部局から28名、学外2大学から4名の教員らが参加しました。

これは、シラバスの作成をベースに教育の基礎を学ぶ、一泊二日の新任教員研修会です(表1)。今回から開催場所を奈井江温泉ホテル北乃湯から北広島クラッセホテルに変更しました。ホテルの老朽化や規模的に部屋数の確保が難しいためです。

シラバスの基本は、授業の目標、学習方略、学習評価の3つですが、これに合わせて3回のグループ討論が行われました(写真1)。普段、教員は同僚と研究の話はしても教育の話はしない傾向がありますが、この2日間は、通常会うことのない方々

と共に教育についてじっくり考える時間をもてたと思います。

この研修会は、ホテルだけではなく、研修プログラムの変更も行わなければならない時期になっています。シラバス作成には内容的に直結していない、北大に関する情報や利用できるリソースの紹介をたくさん盛り込んであります(写真2)。これらは新任教員にとってはどれも大切な情報なのですが、研修のメインの流れが分断されてしまい、またスケジュールが詰まりすぎているという問題があります。来年度から高等教育研究部のFD担当グループが改編されるため、それと同時に新任研修会のあり方を議論していきたいと思っています。

(山田 邦雅)

表1 第23回北海道大学教育ワークショッププログラム

2013年11月8日(金)		2013年11月9日(土)	
8:30 受付開始 情報教育館3F スタジオ型中講義室 8:45 挨拶 新田副学長 9:05 バス出発 挨拶, 自己紹介 9:55 北広島クラッセホテル到着, 玄関前で記念写真 10:05 レクチャー「北大の全学教育と総合入試」 10:35 レクチャー「教育における著作権とELMS」 11:05 休憩 11:15 レクチャー「もっと授業に図書館を～空間・資料・サポート～」 11:45 レクチャー「FDの目的と教育倫理」 12:15 昼食 13:00 オリエンテーション「ワークショップとは」・アイスブレイキング 13:30 ミニレクチャー「IRの取り組み～データからみえる北大生の特徴」 13:50 休憩 14:00 WSレクチャー「カリキュラムの構成要素とシラバス」 14:35 グループ作業I「授業の設計1:講義題目・目標の設定」	15:35 発表・全体討論 16:05 休憩 16:15 WSレクチャー「教育方略」 16:45 グループ作業II「授業の設計2:方略」 17:45 発表・全体討論 18:20 ミニレクチャー「新渡戸カレッジについて」 18:45 夕食(クリッカー) 19:55 懇親会		
		2013年11月9日(土)	
		6:30 朝食 8:30 WSレクチャー「教育評価」 9:00 グループ作業III「授業の設計3:評価」 10:00 発表・全体討論 10:50 休憩 11:00 ミニレクチャー「産学連携本部のミッションと活動」 11:20 修了証書授与式 11:30 参加者の個人的感想や意見 12:00 バス出発	



写真1 グループ討論



写真2 今回導入したレクチャー「もっと授業に図書館を」

第3回北海道大学教育改善マネジメント・ワークショップを開催

12月6日に、高等教育推進機構の大・中会議室において、第3回北海道大学教育改善マネジメント・ワークショップを開催し、学外参加者7名を含む25名が参加しました(表1)。

本ワークショップの対象は、着任5年以上の中堅層教員です。中堅層教員は、委員会やワーキンググループの委員に任命されることが多くなりますが、大学という組織の一員として管理運営に関わっていく方法を体系的に学ぶ機会は多くありません。本ワークショップでは、具体的課題をグループで解決するための行動計画を立てることで、実践的に教育マネジメントについて学ぶことを目的としています。

今回のテーマは「大学の国際化」で、今年度開校した「新渡戸カレッジ」の各ミッションに、6～7人のグループで取り組みました。

- A. 学生間のコミュニケーションを促進する
- B. 学生-教員(フェロー)間のコミュニケーションを促進する
- C. 多文化交流科目の日本人履修者を増やす
- D. 来年度入学生の新渡戸カレッジ入学希望者を増やす

山口淳二教授による講演「新渡戸カレッジと課題」後のワークショップ(以下WS)1では、課題の背景やニーズの解析を行いました。社会・大学・学生は何を期待しているか、現状はどうか、関係者、実行期限等をワークシートに記録します。課題を具体的に再整理・再検討し、グループ全員で共有するこ

とが目的です(写真1, 2)。

WS2では、課題解決への組織的目標設定を行いました。組織のマネジメントは、明確な目標を設定・共有することから始まります。一教員では達成できないチャレンジングな目標を設定することで、グループとしての強みを生かすことができます。また、取組の評価を行うため、目標は測定可能な表現で記述することが求められます(表2)。

WS3では、具体的行動計画を作成しました。WS2で設定した目標項目について、何を、どのような方法・段取りで(実施方法)、いつまでに行うか(期限)、担当は誰か(実施担当者)を記述します。適切な人材を実施担当者にするためには、チーム構成員の特性を把握することも重要です。

WS4では、各グループの行動計画をもとに、他のグループにしてほしいこと、連携で協働したいことなどを討論しました。グループの目標を達成するためや、業務の効率化をはかるための要望等が多く出され、非常に白熱した討論となりました。

今年度のワークショップは、昨年度までの2日間開催から、1日開催のプログラムに変更しました。アンケートでは、「問題解決のアイデアを出すプロセスをワークショップを通じて学べた」「PDCAサイクルを実際の例で学べた」などの一方、「休憩時間がもう少し長いと関連したおしゃべりができて良かった」などの改善点の指摘もいただきましたので、改良に向けた参考といたします。

(竹山 幸作)

表1 第3回北海道大学教育改善マネジメント・ワークショップのプログラム

9:00	受付 北海道大学・高等教育推進機構・中会議室	12:00	<昼食>
9:15	写真撮影	13:00	ミニ講義「目標管理とチームワークの方法」+ <WS2の課題の説明>
9:20	開会挨拶 高等教育推進機構長 新田 孝彦 副学長・理事	13:20	WS2「目標管理：課題解決への組織的目標設定」
9:25	世話人/参加者 自己紹介	14:20	WS2の発表
9:35	研修のオリエンテーション・イントロダクション ミニ講義「このワークショップの趣旨」	14:50	<休憩>
9:45	アイスブレイキング	15:00	ミニ講義「戦略：チームによる目標達成への行動計画・役割分担」+ <WS3の課題の説明>
10:15	<休憩>	15:20	WS3「行動計画・役割分担の設計」
10:25	メインテーマ「大学の国際化」のもとにチームで検討する課題の提示「新渡戸カレッジと課題」 山口 淳二 新渡戸カレッジ教務専門委員長	16:20	WS3の発表
10:40	ミニ講義「課題の把握とニーズ・背景・課題の解析と意志決定」+ <WS1の課題の説明>	17:00	<休憩>
10:50	WS1「課題の背景・ニーズ・関係者・期限の把握」	17:10	ミニ講義「成果確認と評価・発展」
11:30	WS1の発表	17:20	WS4「課題対応の発展(委員会における連携模索)」
		18:20	修了証授与式
		18:25	研修についてなど、感想・意見・アンケート
		18:45	<解散>



写真1 山口教授による講演

写真2 グループ討論のようす

表2 成果物の一部要約 (Bグループ)

WG名称	Bグループ	
課題名	学生-教員(フェロー)間のコミュニケーションを促進する	
目的		
<ul style="list-style-type: none"> ・学生があるべき姿になるための(将来設計を明確にするための)情報にアクセスできるようにする。 ・学生や教員が気付かなかった問題・課題について気付くこと。学生のニーズを教員が知ること。 ・新渡戸カレッジの人物像について学生と教員が共有する。 ・具体的な問題を解決する。例:メンタルなケア,カリキュラムの問題,留学資金確保。 		
目標カテゴリ	目標項目	達成基準
新渡戸カレッジの人物像(全体)	<ul style="list-style-type: none"> ・講演会を開催する。有名なフェロー,北大の先生が先生の立場から話す。外部の方を招く。 ・学生にセミナーを主催させる。(チャレンジ) <u>海外の方。</u> ・国際的に活躍する人物 ・オープンキャンパスと連動させる。 ・学生に講演に対するフィードバックを求める。(感想文など) 	<ul style="list-style-type: none"> ・大学主催+学生主催が2回/学期以上 ・学生が呼ぶ講演者は海外の方が50%以上(海外の方:日本の大学を卒業し海外で活躍されている方を含める。) ・聴衆の数は,200人以上
将来設計(個別,将来)	<ul style="list-style-type: none"> ・インターンシップを活用する。インターンシップの行先についてフェローと相談する機会を設ける。 ・個別に幅広い人(例:フェロー)とコミュニケーションする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・進路相談1回/学期以上(進路設計の準備をさせておいて実施)
【目標項目】・実施項目	実施方法・【期限】	実施担当者
新渡戸カレッジ運営・関連セミナー企画への学生の参加	【2013年12月】理念の明確化,共有,実施計画の策定	全員
	【2014年2月】新渡戸カレッジ運営体制における学生の位置づけの決定,関連規則の整備 ・学外連携専門委員会が第一候補	会沢→(大学執行部)
	【2014年4月】運営に参加する学生の組織化・役割分担の決定 ・学生WG各学年10名強(担当教員の担当している学生グループごとに1名)→互選で学年代表・副代表各1名,教員:2名	山田,乙黒→(学生担当教員,フェロー)

初心者向け ELMS ミニ講習会を開催

平成 25 年 11 月 13 日（水）に、情報教育館 2 階情報メディア教育実習室にて、高等教育推進機構、新渡戸カレッジ主催の「初心者向け ELMS ミニ講習会」を開催しました。本講習会は、9 月にトライアルとして実施した初心者向け ELMS ミニ講座の内容を、全学から募った 15 名の参加者を対象に実施したものです。

ELMS は、北海道大学の教育学習支援システムです。課題の実施、資料の掲示、掲示板のコミュニケーションツールなど、様々な授業支援のサービスを利用することができます。学部学生は、1 年次の情報学で利用し操作に習熟している一方で、教職員にはほとんど利用したことがないという方も少なくありません。そこで、ELMS 利用教員の裾野拡大を目的

に、本講習会を企画・実施しました。

研修は、講師が ELMS を操作する画面を見せた後、参加者も実際に操作する手順を進めました。初心者向けということで、内容は、①サインオンなどの基本事項、②お知らせ・資料の掲載、③ファイル提出課題作成、④メールの一斉送信、などの授業や実務において必要とされる最低限に絞っています。

情報メディア教育実習室を使用した初めての講習会であったため、一部手間取った部分もありましたが、アンケートではおおむね満足いただけたとようです。また、何点かご指摘をいただきましたので、次回以降の講習会改善につなげていきたいと考えています。

(竹山 幸作)



写真1 講習会のようす

入学者選抜 ADMISSION SYSTEMS

着任のごあいさつ

入学者選抜研究部門 准教授 飯田 直弘

2013年10月1日に入学者選抜研究部門准教授として着任いたしました、飯田と申します。同年3月末までは九州大学教育学部助教として、4月以降は同大学院人間環境学研究院学術協力研究員として勤務していました。

私の専門は比較教育学で、大学学部生の頃から一貫してイギリスの試験制度（資格制度）の研究に取り組んでいます。比較教育学は、日本と海外の教育事象を比較し、それに基づき得られた知見から、現在の日本の教育改革に提言を行い、さらには教育の本質にアプローチする学問領域です。博士論文では、イギリスの資格制度改革における普通（一般）教育と職業教育の融合と乖離に焦点をあて、研究成果をまとめました。日本でも昨今、大学入学者選抜の方法について、新しい制度枠組の策定も含めた議論が行われており、近い将来大きな改革が行われることが予想されます。自身のこれまでの研究蓄積・成果を生かして北海道大学の改革に貢献できればと考えています。

私は現在、高大連携研究会で入試制度の改革にかかわる業務に携わっていますが、入学者選抜研究部門に直接的にかかわる研究・業務以外にも、FD・SD、授業評価など、これまでに他部門のさまざまな業務に携わる機会をいただきました。そういった意味で、まさに大学改革全般にかかわることのできる高等教育推進機構の任務はとてもやりがいのある

ものだと感じています。

現在は、大学と企業における人材育成の観点と入学者選抜の在り方を中心に研究を行っています。また、共同研究として国際バカロレアとそれをモデルとする教育プログラムに関する実証研究に取り組んでおり、さらには中核的専門人材育成にかかわる調査研究プロジェクトと、学士課程教育の質的変革に資するガバナンスの在り方に関する研究にも参画しています。これらの研究成果についても、今後、入学者選抜研究部門のみならず、高等教育推進機構全体の教育研究機能の向上・促進のために役立てられればと考えています。

最後に、着任して数か月が過ぎようとしています。人が環境にとっても恵まれていて、北大に赴任が決まって本当に良かったと喜びを実感しています。着任当初は、福岡から札幌への「大移動」だったこともあり、若干の不安もありましたが、周りの方々のおかげでこちらの生活にも適応しつつあります。これから長い時間をかけて、いただいた恩を少しずつ返していきます。今後ともどうぞよろしく願いいたします。

生涯学習 LIFELONG LEARNING

特別講義「キャリアデザインⅠ」開講

全学教育の特別講義「キャリアデザインⅠ」を開講しています。

本講義は、平成6年度より学部1年生を対象としたキャリア教育の一環として開講しています。入学後のできるだけ早期に自らのキャリアを考えるきっかけを与え、自らの目標に向かって前向きに勉学することを促すことを目的に、社会の第一線で活躍している方々の学生生活から現在に至るまでの体験談、キャリア形成についての講義、グループでの

ディスカッションなどを通じて、大学で「学ぶこと」と社会で「働くこと」の意義や関連性を考え、今後の自らのキャリアを考えるきっかけとすることができるような内容となっています。

今年度は、1年生48人が受講しており、表1のとおり、担当教員の講義のほか、小柴キャリアセンター長の講義、さらには、外部講師として、吉田拓也氏（NHK札幌放送局ディレクター）、中村祐美子氏（ピンコーインターナショナル株式会社）、松村

表1 平成25年度 キャリアデザインⅠ スケジュール

① 10月 3日 (木)	○オリエンテーション
② 10月10日 (木)	○受講にあたっての基本事項
③ 10月17日 (木)	○キャリア概論Ⅰ (亀野)
④ 10月24日 (木)	○自己分析
⑤ 10月31日 (木)	○キャリア概論Ⅱ (小柴キャリアセンター長)
	○自己分析の結果返却
⑥ 11月 7日 (木)	○外部講師による講義やグループワークについて
	○グループワークⅠ：グループの編成分け、討論開始
⑦ 11月14日 (木)	○グループワークⅡ：調査及び討論
⑧ 11月21日 (木)	○外部講師Ⅰ：吉田拓也氏 (NHK札幌放送局ディレクター)
	「テレビディレクターは素敵な仕事！」
⑨ 11月28日 (木)	○グループワークⅢ：調査及び討論
⑩ 12月 5日 (木)	○外部講師Ⅱ：中村祐美子氏 (ピンコーインターナショナル株式会社)
	「国際協力という仕事～点から線へ、線から面的拡大へ～」
⑪ 12月12日 (木)	○外部講師Ⅲ：松村直樹氏 (株式会社リアセック代表取締役)
	「大学で学ぶ「キャリア」とは」
⑫ 12月19日 (木)	○グループワークⅣ：調査及び討論
⑬ 1月 9日 (木)	○グループワークの発表Ⅰ
⑭ 1月16日 (木)	○グループワークの発表Ⅱ
⑮ 1月23日 (木)	○全体のまとめ



写真1 外部講師の講義時のグループワークの様子

直樹氏（株式会社リアセック代表取締役）の3人をお招きし、お話をいただきました。外部講師によっては、講義の中でグループワークを取り入れていただき、学生参加型の授業となりました。これらとは別に、グループワークも実施しており、「○○とし

て活躍するために必要なこと」(○○には各グループで選択した職業が入ります)というテーマで調査やインタビューなどを実施し、プレゼンテーションを行うこととしています。

(亀野 淳)

スポーツトレーニングセンター耐震補強工事について

2013年10月1日より、スポーツトレーニングセンターの耐震補強工事が行われています。工事期間は12月20日までの予定となっていました。約1ヶ月延長され2014年1月末まで行われること

になりました。現在、2月上旬には開館できるように工事が進められています。

しばらくの間ご不便をおかけ致しますが、ご理解の程よろしくお願い致します。(瀧澤 一騎)

科学技術コミュニケーション CoSTEP

サステナビリティウィークで CoSTEP の映像作品を上映

オープニングイベント “GiFT” への協力

科学技術コミュニケーター養成プログラム (CoSTEP) は、2012年度からサステナビリティウィーク (以下 SW) の実行委員会に参加し、国際本部と連携しながら北大の国際広報にも携わっています。SWのオープニングイベント “GiFT ~ Global issues Forum for Tomorrow” (2013年10月26日開催) は、研究者自らが英語で研究の意義や魅力を12分間で伝えるプレゼンテーションイベントです (2013年は6名の教員が出演)。2011年に始まり、「北大版 TED」とも呼ばれています。

昨年度に引き続き、CoSTEPからはGiFTのセッションの合間に上映する映像作品 (英語) を提供しました。札幌キャンパスの自然を描いた「Discover Nature at Hokkaido University」(5:32) と、北大の理念を紹介する「Head for the Frontiers」(6:04)。留学生の声を届ける「Experience in Hokkaido University」(3:00) の3本です。留学生を取材した映像は、本科の重田光雄さん (映像制作実習) が作りました。全てCoSTEPチャンネルで公開されています。(http://costep.hucc.hokudai.ac.jp/

costep/channel/)

札幌キャンパスの自然を再発見

「Discover Nature」のロケは、CoSTEPの映像制作実習が始まる5月中旬から取り組みました。3人の受講生とともに、キビタキやオオルリなど初夏の渡り鳥を探してキャンパスを歩き、また高等教育推進機構の裏手にある自然林では、オオバナノエンレイソウなど地面を埋め尽くす可憐な花々を撮影しました (写真1)。

実は私はCoSTEPに来るまで科学番組専門の映像プロダクションで働いており、中でも自然番組を専門に作っていたので、今回は最も得意な分野です。そんな私が北大に来て一番驚いたのは自然の豊かさです。春になるとフキノトウが顔をのぞかせ、初夏、桜の開花と同時にミズバショウが水辺を彩り、アカゲラは子育てのために飛びかい、キタキツネが草むらに潜む。200万都市の中心に位置する大学としてはあり得ない自然環境に感動しました。本州でいえば、800~1500mの山地に相当する生物相です (後々、北海道の中では特別珍しくない環境だった



図1 「Discover Nature at Hokkaido University」のオープニング画面

と知ることになりましたが)。

この作品には、そんな北大に来た当時の新鮮な感動を詰め込みました。「Discover Nature」というタイトルには、キャンパスをただ美しい風景として見るだけでなく、よく目を凝らして自然を見つめ、キャンパスとともに暮らしている生きものたちの存在を発見してほしいという思いを込めました。

CoSTEP のビデオアーカイブで北大の理念を映像化

日本初の高等教育機関「札幌農学校」として創設されてからというもの、北大は変わらぬ4つの理念「フロンティア精神」「国際性の涵養」「全人教育」「実学の重視」を掲げています。文章としてはよく目にするこれらの理念ですが、CoSTEPで持っている映像素材で、もっと分かりやすくビジュアルに表現できないかと企画したのが、「Head for the Frontiers」という作品です(写真2)。

例えば、「フロンティア精神」を代表する研究者として、中谷宇吉郎博士をとりあげました。世界初の人工雪成長装置を作り、雪氷学の基礎を築いたパイオニアワークは広く知られています。また比較的最近に設置された研究所として、未踏の分野に挑んでいる人獣共通感染症リサーチセンターをとりあげ、アフリカのザンビアでエボラウィルスの調査をする風景や、実験や解析の様子を紹介しました。

「国際性の涵養」の例として1920年から6年間、国際連盟事務次長を勤めた新渡戸稲造博士(札幌農学校2期生)をとりあげました。また「全人教育」の例として、CoSTEPが実施するサイエンス・カフェ札幌。そして「実学の重視」の例として、ノーベル化学賞受賞直後の鈴木章・名誉教授の貴重な映像を紹介しました。これらは全てCoSTEPの活動の中



図2 「Head for the Frontiers」のオープニング画面

で撮りためてきたものであり、時を経て貴重なビデオアーカイブになっていることが、今回の制作を通じて確認できました。今後もこうした蓄積を、SWなど大学広報に活かしてしていけたらと考えています。

留学生たちの声を届ける

北海道大学にはいま、82カ国から1300人以上の留学生が来て学んでいます。今回は3人の留学生たち、バングラデシュの男性、中国(新疆ウイグル自治区)とマダガスカルの女性に出演していただきました(写真3)。

当初は、制作を担当した受講生も慣れない英語でのコミュニケーションに戸惑っていましたが、だんだん打ち解けてきて、やがて彼らと笑顔でコミュニケーションできるようになりました。留学生から母国や北海道でのたくさんの写真をもらい、3人のインタビューを重ねて、生き生きとした映像作品に仕上げました。

今回、わずか1ヶ月ちょっとの短い期間で3本も作ることができたのは、制作した受講生の努力もさることながら、留学生たちの多大な協力があったことです。彼らが素晴らしい環境で楽しく学んでいる様子が、多くの海外の学生の目に触れ、北大に興味を持ってもらえればと思います。また彼らの日本での様子を、母国の家族や親戚たちに笑顔で見てもらえることを願っています。

ちなみに「Head for the Frontiers」と「Discover Nature」は11月15日から北大インフォメーションセンター「エルムの森」でも上映されています(不定期)。北大にお立ち寄りの際は、ぜひご覧ください。

(早岡 英介)



図3 留学生紹介映像の撮影風景

教育支援 EDUCATIONAL SUPPORT

「英語コミュニケーション with 小西先生」開催

表記イベントが、新渡戸カレッジとアカデミック・サポートセンター（ASC）の共催で、平成25年12月18日・20日の6講目に高等教育推進機構E211にて行われました。これは、オックスフォード大学歴史学部の小西しょう先生と北大生の交流イベントの一環として企画されたものです。18日には16人（うち新渡戸カレッジ生6人）、20日には11人（同2人）の参加者が集まり、進行役である院生チューター4人と小西先生が場の中心となって、英語による楽しく活発な交流が行われました（写真1・中央奥が小西先生）。

そもそも「英語コミュニケーション」という企画はASCが今年度第1学期より実施しているもので、短期留学が必須である新渡戸カレッジ生を主な対象に、英語によるコミュニケーション能力を気軽に伸ばせる場の提供を狙いとした企画です。英語が堪能な留学生チューターを参加者が囲み、決まったテーマについて英語で会話するという形をとっており、優秀で積極的なチューターが中心となって活動を続けています。「英語コミュニケーション with 小西先生」はこの活動の臨時企画であり、海外生活の長い小西先生をゲストに迎えることで、より楽しく効果的な内容になるように意図したものです。今回のイ

ベントは参加者の自己紹介から始まり、小西先生自身による経歴の紹介、英語の勉強法や国外生活などについての会話、小西先生との質疑応答など、多岐に渡る交流が英語で行われました。

小西先生は非常に興味深いバックグラウンドをお持ちの方です。アメリカの士官学校で学士取得、ロシアへの留学も経験、シカゴ大で学位取得、更に神学校でも学んだ経歴をお持ちであり、現在はイギリス在住、オックスフォード大学歴史学部に所属と、まさに国際人という形容がふさわしい人物です。海外の放浪生活やフィヨルドの山のガイド、マオリ族との出会いの経験など誰もが興味を抱く来歴に、思想精神史やトランスナショナル史などの多彩な研究分野に携わる方でもあり、新渡戸カレッジ生が学ぶべき人物としてまさにうってつけの存在です。参加した学生たちの様子からは、英語の勉強法や留学について、外国での生活などの一般的な話題への興味はもちろんのこと、小西先生自身への強い興味も中心的な参加理由であるように見受けられました。小西先生も、参加した学生たちからの鋭く難しい質問に対して、ジョークを交えつつも真摯に答えて下さいました。参加者に実施したアンケートにおいても好評な結果が得られ、小西先生のインテリジェンス

とユーモアに溢れた人柄も相まって、学生達にとって有益なイベントとなったのではないかと感じています。

日本においては、アカデミックな場である大学の中においてさえも、英語のみでコミュニケーションを取る機会が得られる場所は多くは無いのが現状で

す。日本人学生の英語への拒否反応も、その能力を磨く機会が少ないことに起因している面があると思います。今後もこのような英語が関連したイベントを開き、学生たちに英語コミュニケーション能力を高める場を提供していけたらと考えています。

(清水 将英)



写真1 英語コミュニケーションのようす

日誌 EVENTS, September-December

9月

- 4日(会議) 第3回全学教育専門委員会
- 5日(会議) 第70回教務委員会
- 5日(会議) 平成25年度第2回高等教育推進機構学務委員会
- 8日(説明会) 主要大学説明会(広島)
- 11日(会議) 第2回クラス担任連絡会
- 11日(説明会) 北海道大麻高校での北大説明会
- 19日~28日(会議) 第1回総合教育教務専門委員会(持ち回り)
- 19日(会議) 平成24年度第6回大学IRコンソーシアム運営委員会(TV)
- 25日~26日(行事) 学部・学科等移行ガイダンス及び学部・学科等紹介
- 26日(会議) 平成25年度第5回教育改革室会議
- 28日(行事) ホームカミングデーでのキャンパスツアー

10月

- 7日(会議) 北海道地区FD・SD推進協議会幹事会
- 8日~16日(行事) AO入試・帰国子女入試願書受付

- 12日(行事) 北大セミナー in オホーツク
- 20日(行事) 秋のキャンパスツアー
- 21日(説明会) 札幌手稲高校での北大説明会
- 21日(説明会) 代々木ゼミナール札幌校での北大説明会
- 23日~24日(研修会) 北海道地区大学SD研修「大学職員セミナー」
- 26日(行事) 北大進学相談会(名古屋会場)
- 27日(行事) 北大進学相談会(大阪会場)
- 31日(会議) 平成25年度第6回教育改革室会議

11月

- 2日(行事) 北大進学相談会(東京会場)
- 4日(行事) 秋のキャンパスツアー
- 5日~12日(会議) 第2回総合教育移行専門委員会(持ち回り)
- 5日(会議) 入学者選抜委員会
- 5日(行事) AO入試・帰国子女入試第1次選考結果発表
- 6日~13日(会議) 平成25年度第3回高等教育推進機構運営委員会(持ち回り)
- 6日(会議) 平成25年度第1回大学IRコンソーシ

- アム運営委員会 (TV)
- 8～9日 (研修会) 第23回北海道大学教育ワークショップ (北広島)
- 12日 (行事) 札幌旭丘高校学問研究会
- 17日 (行事) AO入試・帰国子女入試第2次選考日
- 19日 (会議) 大学IRコンソーシアム第1回定時総会 (TV)
- 19日 (行事) ボランティア養成講座
- 21日 (会議) 第4回全学教育専門委員会
- 21日～27日 (会議) 第2回総合教育教務専門委員会(持ち回り)
- 25日 (会議) 北海道地区FD・SD推進協議会総会
- 25日 (行事) 冬山登山講習会
- 27日 (会議) 平成25年度第4回学生委員会
- 28日 (会議) 平成25年度第7回教育改革室会議

- 3日 (行事) AO入試 (大学入試センター試験を課さない学部・学科)・帰国子女入試合格発表
- 4日 (会議) 第71回教務委員会
- 4日 (会議) 平成25年度第4回高等教育推進機構学務委員会
- 5日 (会議) 『大学間連携共同教育推進事業』平成25年度第2回教学評価運営委員会 (同志社大学)
- 6日～12日 (行事) AO・帰国子女入学手続き期間
- 6日 (研修会) 第3回北海道大学教育改善マネジメントワークショップ
- 20日～26日 (会議) 平成25年度第4回高等教育推進機構運営委員会 (持ち回り)
- 26日 (会議) 平成25年度第8回教育改革室会議

12月

- 2日 (会議) 入学者選抜委員会

行事予定 SCHEDULE, January-March

◆1月

- 6 (月) 授業再開
- 14 (火) 月曜日の授業を行う日 (火曜日の授業は行わない)
- 17 (金) センター試験準備 (休講)
- 18 (土) ～19 (日) 大学入試センター試験
- 22 (水) 水曜日の授業終了日
- 29 (水) 初習外国語統一試験日 (通常授業は休講)
- 30 (木) 木曜日の授業終了日
- 31 (金) 金曜日の授業終了日

◆2月

- 3 (月) 月曜日の授業終了日
- 4 (火) 火曜日の授業終了日 (第2学期授業終了日)
- 5 (水) 午後 学部・学科等移行ガイダンス
- 6 (木) 学部・学科等紹介
- 10 (月) 成績報告締切(常勤[Web入力], 非常勤[帳票])
- 17 (月) 平成18～25年度入学者の全学教育科目成

- 績 Web 上公開
- 17 (月) ～18 (火) 全学教育科目成績確認及び成績評価に関する申立て期間
- 17 (月) ～21 (金) 自由設計科目登録変更期間
- 19 (水) 私費外国人留学生入試第2次選考
- 25 (火) ～26 (水) 北海道大学第2次入学試験 (前期日程)
- 28 (金) 正午 全学教育科目成績確定
- 28 (金) 午後～ 第1年次進級判定
- 28 (金) 午後～3月20日 (木) 学部・学科等移行手続き (第1回志望調査～各学部振り分け)

◆3月

- 12 (水) 北海道大学第2次入学試験 (後期日程)

ニュースレター 2014, No.97 目次

〈巻頭言〉 国際的通用性のある GPA 制度の導入について 鈴木 久男 …………… 1	
平成 25 年度北海道地区 FD・SD 推進協議会総会開催 される …………… 4	初心者向け ELMS ミニ講習会を開催 ……………16
学務委員会報告 …………… 6	着任のごあいさつ 飯田 直弘 ……………17
「学生調査 2012 年報告書」から見える北海道大学の学 生像 (2) …………… 7	特別講義「キャリアデザイン I」開講 ……………18
第 16 回ソウル大学・北海道大学ジョイントシンポジウム 分科会「総合力と創造力のための新しい教育的試み」 …………… 9	スポーツトレーニングセンター耐震補強工事について ……………19
授業の質保証をめざして ～第 23 回北海道大学教育ワークショップ～ …………… 10	サステナビリティウィークで CoSTEP の映像作品を上映 ……………19
第 3 回北海道大学教育改善マネジメント・ワークショッ プを開催 …………… 11	「英語コミュニケーション with 小西先生」開催 ……………21
	日誌・行事予定 ……………22
	目次・編集後記 ……………24

編集後記

新年あけましておめでとうございます。カレンダーの関係で例年よりも長い年末年始の休暇になりましたが、あつという間でしたね。12 月半ばまでは前年の大雪が嘘のように少ない雪でしたが、ほぼ例年通りの降雪量になりました。でも、これからは冬本番です。やはり冬の北海道に雪が少ないのは似合いません。冬の生活は大変ですが、冬を楽しむ心の余裕を持ちたいものです。郷里に帰省した学生も多かったことでしょう。故郷の良さを、故郷を離れて初めて気づいた学生も多いことでしょう。学生の皆さんには北海道が第二の故郷となるよう有意義な学生生活を送ってほしいと思います。(かめ)

ニュースレター (旧「センターニュース」)

(北海道大学高等教育推進機構広報誌)
通算 第 97 号

発行日： 2014 年 1 月 31 日
 発行元： 北海道大学高等教育推進機構
 (旧高等教育機能開発総合センター)
 〒060-0817 札幌市北区北 17 条西 8 丁目
 電話 (011) 706-7520, FAX (011) 706-7854
 編集委員：◎細川敏幸・山田邦雅・竹山幸作・木村純
 亀野淳・三上直之・瀧澤一騎・鈴木誠
 池田文人・飯田直弘
 ご意見、お問い合わせは◎印の編集委員まで
 電話 (011) 706-7514, FAX (011) 706-7521
 インターネットホームページ：
<http://educate.academic.hokudai.ac.jp/center/index.html>